

いのちの水

二〇一八年

十二月号

六九四号

天使は言った。私は民全体に与えられる大きな喜びを告げる。
(ルカ2章10)

そのキリストがこの世界に
来られたのは何のためだったの
か。
一般的には、よい教えを与え
るためだと思われる。例
えば、ブツダ、孔子なども同
様で、とくに中国の影響で、
キリスト教、仏教、儒教、イ
スラム教、などというように、
〇〇教というのが付けられる。
このような言葉のゆえに、キ
リストなどもよい教えを与え
るために生きた人なのだとい
うような考えがしみ込んで
いる。

目次

- ・キリストがこの世に來ら
れた目的 5
- ・詩篇23篇とキリスト 8
- ・応えてくださる神(追加)
- ・休憩室、お知らせ 13



キリストがこの世に 來られた目的

12月はクリスマス月の、各
地でクリスマスツリーが飾ら
れ、クリスマスソングのメロ
ディーが聞かれる。しかし、
日本ではクリスマスとは何の
日なのか、そもそもクリスマス
スという言葉はどんな意味な
のか、ということもほとんど
関心が持たれていない。

Christmas それは、Christ
(キリスト)と、mas が合
わせられた言葉であり、mas
とは mass の短縮形で、日本
語ではミサである。

すなわち、クリスマス
Christmas とはキリストのミ
サという意味であり、キリス
トを礼拝する日ということな
のである。

けれども、クリスマスとい
う日本語表記では、キリスト
という言葉がそのなかにある
ことさえ気づかれないために、
クリスマスといえ、よく見
かけるために、サンタクロ
スの日のように思ってしまう
ことが多い。サンタクロ
スも サンタ・クロース、すな
わち、聖ニコラウス(ニコラ
ス)のことであり、4世紀初
めに小アジア(トルコ)の町
の司教であった聖ニコラス
Saint Nicholasに由来する。
彼が、キリストの心をもって
貧しい人や子供たちによきも
のを分かち与えたという言い
伝えが広まったもので、クリ
スマスやサンタクロースとい
う名前にもそこには、キリス
トが中心にあるのがわかる。

しかし、キリスト教という言
葉は、英語では、
Christianityであって、-ity
は、本質を表す接尾語である。
キリストの本質 といった意
味である。
キリストがこの地上に來ら
れたのは、単によい教えを与
えるためではない。真理につ
いて教えるためというのはキ
リストの使命の一部にすぎな
い。

キリストが来られたのは、新約聖書においてもその最初に記されている。

この世にうまれたとき、その名前をイエスと名付けよ、それは、イエスが人々を罪から救うからだ、と天使が告げた」と記されている。

名前は、聖書においては、その本質を表わすものとして重要な意味を持っている。

ここで、新約聖書の巻頭から、イエスの使命は、罪からの救いだというのが、神からのメッセージなのである。

罪、それはあらゆる人間が持っている。いかにやさしい穏やかと見える人も、人間に対して好き嫌いの感情があるし、他者からやってもいけないことをした、と言われたり根拠のない中傷をされたり、自分の愛する子供をいじめられたりされるなら、たちまち相手を疎んじ、あるいは嫌い、憎むようになるであろう。

また、隣人を愛せよと言わ

れている。隣人とは、何らかの関わりがあつたり、出会う人々すべてを含む。そうしたあらゆる人々に対して、その人たちがよくなるようにと祈りの心を持つて対しているだろうか。

新聞やニュースで出てくる事件や災害にあつた人たちに、つねにその人たちが力を与えられますようにと祈りの心をもつて見ているだろうか、単に新しい珍しいことだから、といった興味本位や好奇心で見ているというのが大多数の心情であろう。

しかし、聖書においては、神のご意志が記されており、それは、本当の人間のあり方というものは、自分に害悪を及ぼす人―敵対する人に対して、もその人がよくなるようにと祈ることであり、いかに悪しき人であっても、憎しみを抱くだけで、その人を殺すのも同然である、というほどに高い基準が示されている。

そうした高いあり方が人間の正しいあり方であり、そのあり方からはずれていることをみな、罪という。

他者に対して無関心というだけで罪だ、ということになると、だれが罪がないなどと言えよう。使徒パウロが書いているように、そうした高い標準、神ご自身の愛や真実、正しさ、清さを前にするとき、すべての人間は、罪があり、汚れている―ということになる。

しかも、そのような罪は、いかに科学技術が進展しようとも、経済的に豊かになつても、また医学によつて健康が保持されようとも、また外国旅行や趣味、娯楽を多くやつてもどうすることもできない。学問やスポーツなどでノーベル賞や金メダルをとつたといえども、罪はまったく変わらずにその人の内部に存在しつづける。そして、そうした榮譽を受けて有名になり、報酬も

豊かになると、そのような有名人に群がる人たちに取り囲まれることになり、いつそう貧しき人や弱い人たちとの関わりは少なくなり、そうした人々の関心も薄れていくことが多い。

かえつて、豊かになると、衣食住にわたつて贅沢になり、さらに不要な贅沢品や飲食物を求めたり、互いに分かつという心を失つて、欲望がさらにふくらんでいくことも多い。

マザー・テレサが書いていたことがある。初めて貧しい人たちのところへと赴いたとき、自分は小さな弁当を持っていた。それをみすぼらしく貧しい子供が見て、欲しそうにせがんだので、分けてあげた。すると自分で飢えたおなかを満たすために食べてしまうのでなく、すぐに小屋のようなみすぼらしい家に行つて、家族に分ち与えた―ということが書いてあつた。

また、東南アジアに船乗り

として行っていた人から直接に聞いたことだが、その船が岸壁についていたとき、その地域の人たちが船に乗っている人たちから何かをせがんでいた。それでその人が、お菓子などを投げてやった、それが海に落ちると、一部の人はすぐに飛び込んでそれを拾い上げ、陸に上がって、そこにいた家族たちに分かち与えていた―というのである。その光景が強い印象に残ったと、その人は語っていたのを思いだす。

いかに、軍備を整え、経済が成長し、医療も福祉政策もよくなったとしても、人間の心は清くはならないし、真実な無差別的な愛もうまれない。一人や二人の子しか持たない夫婦が多い。そのため塾に送り迎えし、食事也十分、おやつや遊具、また衣服などもたくさん買い与え、旅行も各地に連れていき、―また大学も数百万の金を投じて県外の有名大学を卒業させた―等々を

尽くして大きくしても、大人になつて親が病気になるまで苦しんでいても、見舞いのために病院にも来ない―こんなことなら、大学に行かせるのでなかった―息子を有名大学に入れた人の病床を訪ねたとき、苦しみと悲しみの表情で語っていた人を思いだす。

こうした愛や真実、正しさ、清い心などを持ってない―それが人間の根源にある問題であり、それをキリスト教では罪といっている。それらはみな、目には見えないものであり、金や権力では買うこともできないものである。

この世界のあらゆる問題は、そのもとを掘り下げていくと、必ずこうした人間の深い罪―自分中心に考え、行動すること、そして目に見えないものを無視あるいは軽視すること、がもとになっているのに気づかされる。

それは親子、夫婦といった最も身近なところから、学校、職場、また地域や日本、世界

全体の根源に深く内在するものであり、そうした個々の人間に内在する罪があるからこそ、争いが生まれ、ねたみ、憎しみや差別、いじめ、迫害、嘘、欺き…等々が生じる。それが、大きくふくらんで民族や国同士の戦争などになっていく。

世界に誇る憲法9条があり、そのゆえに日本は70年余り、外国と戦争も内戦もしていない。だからといって、個々の人間に愛や真実、正義を第一にしようとする心がより成長しているだろうか。

そんなことはない。さきほどの病気に苦しむ親への見舞いもしようとしないような傾向がむしろ増大しているし、子供同士がいじめ合い、若い世代の自殺率は世界のトップクラスにあるということはそれを物語っている。

大学進学率は50%を越えるようになった。戦前は四国には大学は一つもなかったし、全国でもごくわずかであった。

その点では、飛躍的に国民が大学での学問をやっているようになった。しかし、愛や真実、正義感などは豊かになることはなく、社会的な関心や未来の日本や世界はどうあるべきか、などの広い視野も育っていない。いかに政治が腐敗していても、原発の事故故によつて、大きな偽りが明らかになつても、そのために学生たちが大きな反対や抗議の声をあげる―というようなこともほとんど見られない。

こうしたことを深く考えるとき、科学技術や政治や社会の制度、法律、医療などがよくなるように、と変えていくことはもちろん必要である。

しかし、それら人間のいわば外側の変革をいかに進めても、人間の根源にある罪の問題はどうすることもできない。

その罪の問題を解決するためにこそ、キリストは来られた。それゆえに、新約聖書の巻頭に、イエスがこの世にうまれたのは、罪からの救いの

ためだと告げられているのである。

罪のない姿―それはキリストが完全な私たちで表された。しかし、現在キリストは目に見えるかたちで接することもできない。信じることなければ、そのキリストの完全な姿も心に入っていない。

しかし、神は、そうした信じることしようとしないうちに、じつさいに目に見えるかたちで罪なき姿を日々示されている。それが自然のさまざまの清く美しい姿である。夜空の星々の輝き、そこにはいかなる汚れもなく、人間は汚すこともできない。いかに雲がかかろうともあくまで星々はその光を投げかけ続けている。

また、山野に咲く野の花、イエスも「野の花を見よ！」と言われたように、そのたまたま、色合い、雰囲気はまさに罪なき神のお心を部分的にせよ反映したものとなっている。

神は人間への愛ゆえに、神やキリストを信じられない多数

の人たちにも、その罪の清められた姿を、私たちの周囲の到る所に示しておられるのである。空を見上げるなら、青い澄んだ大空、真つ白い雲、そして朝夕にさまざまな色彩を帯びていく姿、それはみな人間の決して達せない清いすがたであり、しかも雄大な広がり、絶えず変化していく。そこにそれらすべてを創造された神の清い力がある。

クリスマスとは、人間世界の至るところに深く巣くう罪からの救いのために来られたイエスを記念し、感謝し、すでにキリスト者となっている人は、その罪からの救いの力をさらに受ける日なのである。そしてまだそうしたあらゆる人の根源にある罪のことも知らず、罪からの救いも知らない人たちが、その罪からの救いを受けるようにと願う日でもある。

キリストが来られたもう一つの目的

イエスが誕生したとき、その名にはここに記したように罪からの救いということゆえにイエスという名前が付けられたが、もう一つ、誕生のときに、名前が示されている。

…このすべてのこと（イエスの誕生）が起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためである。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。

その名は、インマヌエルと呼ばれる」

この名は、「神は我々とともにおられる」という意味である。（マタイ福音書1の22〜23）

イエスのもう一つの名、それはインマヌエルだと示されている。それはヘブル語でイム（〜と共に）、ヌー（我々）、エル（神）という三語が合わ

さった言葉であるゆえに、「神、我らと共に」という意味になる。

新約聖書の巻頭にこの二つの名、それはその二つがイエスが来られた目的だといふのである。

この二つは別のことではなく、深く関わり合っている。

一二つめのインマヌエル、神にもおられるというのは、罪からの救い、罪の赦しを受けた者が、与えられる絶大な恵みを示している。

神は全能であり、しかも愛、真実、そしていかなる汚れもなく、永遠の存在である。言い換えると、あらゆる良きものに満ちた御方であり、そのような御方が共にいてくださる―それ以上の賜物があるだろうか。

いかに愛あると思われよう、な人間も罪深いものにすぎず、また病気になる、弱くなつていくとき、他者への愛どころか、他人の力なくしては生き

られなくなる。そして死んでいく。

よき人間が共にいることは大きな恵みであるが、人間そのものが、はかないものにすぎないし、そうした愛のある友人を持つている人は少ない。

事故や災害、あるいは、癒されないで、死に近づく重い病気のいじめ、…等々、死にいたる苦しみを持つている人たちは数しれずある。人間の慰めや励まし、サポートも一時的には与えられるが、それもみなそのうちに変質し、消えていく。人間そのものが死して消えていく存在だからである。

いかに良き人と思われている人であっても、ずっとその人と一緒にいれば、必ず互いの性格や考えの違いも感じられてくるであろうし、そもそも人間はそのうちに弱って死んでいくのであって、いつまでも共にいることなど不可能なのである。

そうした現実に対して、いかに長時間いても決して不快になつたりすることもなく、しかも永遠に良きことを与え続けてくださるのが神、あるいはキリストとともにあることである。キリストとともにいることは、すなわち神とともにいることに他ならない。それはさらに、聖霊が与えられていることでもある。神、キリスト、そして聖霊は、新約聖書の多くの個所で示されているように、本質が同じであるからである。

いかなる困難、悲しみにあつても、しかもいかに孤独な、みすてられたような人であっても、心から罪を知り、赦しを願うならば、必ず愛の神ゆえに共にいてくださるようになる。

そして、私たちの涙を深く知つてくださっている。そして時がくれば必ずいやしてくださる。―その時とは、いつなのか。

それは、地上で生きている時においては、復活の力、聖霊による力を与えてくださって苦難に耐える力と、主にある魂の平安を与えてくださるが、さらに、死後には、そうしたいつさいの涙が拭われることになる。

：神は人と共にいて、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。
もはや死もなく、悲しみも嘆きも労苦もない。(黙示録21の3〜4より)

神は全能で、かつ愛であるゆえに、死からの復活もさせてくださり、しかもその復活のからだは、永遠に朽ちないもの、清いものであり、キリストの栄光のからだと同じ形に変えてくださると約束されている。(フィリピ書3の21)

詩篇23篇とキリスト

すでに述べたように、キリストが来られた目的は、罪からの救い、そして神がともにおられることである。

この二つ目の、神が共におられることの祝福が豊かに、かつ心に響く表現で表されているのが、旧約聖書の詩篇23篇である。

聖書の詩のなかで、最も愛されているのは詩篇23篇であろう。

そこには、驚くべき満たされた世界が記されている。

――
主はわが牧者
私には乏しいことがない。

主は私を緑の牧場に伏させ、
いこいのみぎわに伴われる。

主は私の魂をいきかえらせ、
み名のために私を正しい道に
導かれる。

たとい私は死の陰の谷を歩むとも、

わざわいを恐れぬ。

あなたが私と共におられるから。

あなたのむちと、あなたのためは私を慰める。

あなたは私の敵の前で、私の前に食卓をととのえ、

私の頭に香油をそそがれる。

わが杯はあふれる。

私の生きていくかぎりには

必ず恵みといつくしみとが伴う。

私はとこしえに主の宮に住む。

人間は、動物と違って食べ物
が十分にあっても、なお魂の
深いところで何か欠けてい
ると感じるのなぜだろう。

それは、動物には正義と不正
の区別がない。善と悪という
ものは存在しない。

しかし、人間にはそれがその
存在の根源に存在する。

そこから、不正なことを考えたり、したりするならば、心に平安がなくなるように創造されていく。

それは、「何か欠けている」

という実感となる。中心とな

るものが欠けているゆえに、
空しい、空虚、荒涼とした：

といった感情になる。それは
そのまま、「渴いている」と

いう実感と結びつく。

こうしたことは、言い換える

ならば、罪を犯すゆえに、人間
は渴き、空しくなり、荒れて

くる。それをまぎらわすため
にさらに悪事を働くようにな

る。

キリストはその人間の根本問
題である罪からの解放のため
に来てくださった。

罪赦されるとき、それは私た
ちの魂の最も深いところに御

手を触れてくださったという
ことである。そこから何も欠

けることがない—という実感
が与えられる。

そして、キリストの復活以降

においては、活けるキリスト、
すなわち聖霊が私たちの内
に入ってください、また私たち
を導いてください、いのちの
水で満たしてください。

それは、「主が私たちを緑の

牧場に伴い、憩いのみぎわに
伴い、魂を生き返らせてくだ

さる」ことである。

緑の牧場—羊にとっての食物

であり、私たちにとっては、
霊的食物であるキリストを与

えられる。

罪赦され、正しい(義)とさ
れる—それは言い換えると、
正しい道に導かれるというこ

とである。

魂を生き返らせてくださる—

これは生きていくうちにも与
えてくださる恵みであるが、
さらに霊的に受けとるならば、
死してもなお、復活というこ

とが与えられることをも指し
示す言葉である。

こうしてキリストのいのちの

水を与えられ、新たな命を受
けるならば、死というすべて

のものを呑み込む力にも勝利
していく。

それゆえに、「死の陰の谷を
ゆくとも、恐れぬ」と言い
切ることができた。

これは、イエスはもろろん使

徒たちもこのような力を与え
られ、獄に入れられても、な

お祈り、賛美を歌うことがで
きたのである。

パウロと同行したシラスの二
人は、伝道の旅の途中で捕ら

えられ、そして衣服もはぎと
られて裸同然とされたうえに

何度も鞭打たれ、牢に投げ込
まれた。さらに、嚴重な見張

りが付けられ、一番奥の牢に
入れられ、足には足かせまで

付けられていた。昔は牢獄に

は明かりもなく、昼でも暗く、
夜には闇の世界となり、恐ろ
しく不潔な環境である。

そのような状況は絶望的であ
る。さらに鞭打たれるのか、

ずっと牢に入れられたままな
のか、殺されるのか：とかぎ

りなく不安は湧き出てくるで
あろう。

しかし、なんとそのような中、真夜中になっても、パウロとシラスの二人は、賛美の歌をうたつて神に祈っていた、と記されている。(使徒言行録16の16)

これは、まさに「死の蔭の谷を行くとも、災いを恐れない」という詩篇の言葉のとおりの方であり、たしかに主が彼らとともにおられたことがわかる。

私たちの毎日の平穏な生活にあっても、主はともにいてくださる。食前や日中のいろいろなとき、朝目覚めるとき、夜やすむときに祈りときも主はともにいてくださる。

しかし、そうした穏やかな生活が根本的に壊れてしまったときであつても、なお、主はともにいてその困難のなかに平安を与え、闇の力に打ち倒されない力を与えてくださるのだというメッセージがある。

主がともにおられるーこれはキリストが誕生のときに、

「その名はインマヌエルと言われる」と預言された。インマヌエルとは、「神、我らとともに」という意味であるが、そのとおりになった。キリストは、いかなる困難なときにも、求める者とともにいてくださるのを指し示している。

：あなたのむちと、あなたのつえは私を慰める。(4節後半)

鞭というと私たちは処罰の鞭を、杖というと老人が支えにするものーというイメージがある。

しかし、ここでは、羊飼いが用いる鞭なので、自分勝手に歩いて、迷っていかうとする羊を鞭をふるって正しい道に導くためのものであり、また杖もそのようにも使うが、他方、危険な動物が襲うときには、杖で撃退し守ってくださるーという意味が込められている。(*)

私たちの魂の羊飼いである神、

キリストはたしかに傲慢になったり、間違つた道を行こうとするときに、さまざまな困難や痛み、事故、病気などを通して正しい道に導こうとされる。

何らかの重荷がふりかかってきたときーそれも静かに振り返ると自分の罪がその背後に潜んでいたためだと気づかされることも多い。

(*) 鞭と杖と訳し分けている原語は、ともに「杖、棒」を表す。英訳でも、rod and staffであり同様な意味。Rodは、若枝、棒、杖を意味するが、懲らしめとか鞭という意味でもつかわれる。staffも、杖、棒、支えの意。なお、英訳では、羊飼いの鞭と杖は、「私を守ってくださった。」(rod and staff protect me. TEV)と訳しているものもある。

おそらく、たいいていの人において、神の鞭がなければ、あるいは神から棒で痛いほど打たれなかったら、そのまま間違つた道を行ってしまっただろうーと思われることがたくさんあるであろう。それほど私たちは傲慢になりやすく、

間違つた道へとしばしば迷い込むからである。

：あなたは私を苦しめる者の前で、

私の前に食卓をととのえ、私の頭に香油をそそがれる。わが杯はあふれる。(5節)

敵対する者の前で、神は私に霊的な食卓を備え、霊的な力を与えてくださる。香油を注ぐとは、神の本質ー聖なる霊を注いでくださるということであり、それゆえに私の杯は神の霊的な賜物で豊かにされ、あふれるばかりだ。

これも、最初の殉教者ステファノのことを思い起こさせる。彼は、怒り狂つた群衆に石をもつて打たれているそのときに、霊的な祝福を与えられ、神と復活したキリストがともにいるのを見ることを得たと記されている。

そのあふれる祝福ゆえに、死に瀕したときであつてもなお、彼らのために祈りつつ息絶え

たのだった。

：私の生きていくかぎりは

必ず恵みといつくしみが伴う。 (*)

私はとこしえに主の宮に住む。

(6節)

(*) 伴う と訳された原語は、敵を「追いかける、追跡する」というようなときに用いられる強いニュアンスのある言葉である。例えば、「アブラハムは敵を追跡した」(創世記14の14)

この最後の節は、いかにこの詩の作者が、主の祝福を受けていたか、祝福とはいかなることかをよく示している。

一般的には、現実の困難、敵対するもの―それは病気の苦しみも含まれる―からの変ることなき圧迫に直面するとき、恵みと慈しみを求めても求めても与えられない、という嘆きやあきらめとなりやすい。

けれども、この作者において、神の恵みと慈しみ(愛)が、追いかけてくるとい

である。それほどまでに、神からの恵みを受けることは、確実なこととして体験されている。

それは、「神を愛する者においては、万事が益となつて共に働く」(ローマの信徒への手紙8の28)ということに通じる神の約束である。

そしてこの詩の最後は、永遠に主のおられる家に住む―という確信で終わっている。

現代の私たちにとって、最終的な恵みと慈しみは、たしかに、永遠に神のおられる天の国に住まわせていただくことであり、それこそ、復活の大いなる恵みである。

それは、たとえこの世でどのような悲しみや苦難の人生であろうとも、また災害や事故、戦争等々で命を立たれることがあるように、幼な子のようにただ神とキリストを仰いでいるだけで、すでにこの世で永遠の命を与えられ、死後は復活させていただき、永遠に

神とともに祝福のうちにあることが約束されていることである。

それこそ、万人に呼びかけられている最終的な祝福だと言えよう。

応えてくださる神(前号の補足)

盲学校では3年の勤務であった。しかし、そこで担任した二人の生徒がキリスト者となり、一人の全盲の生徒北田康広は、のちに武蔵野音楽大学に進学し、ピアニスト、福音歌手、伝道者として神に奉仕する道へと導かれたし、もう

一人の弱視の生徒Sさんは、のちに、パソコンの操作に上達し、徳島聖書キリスト集会のホームページや私の聖書講話録音CDの作成などを協力してくれるようになった。

また、Sさんの姉は、全盲であったが、英語がとても好き

だとのこと、英語のルカ福音書の点字版を取り寄せて、それを点字で学んでいくうちに、別の宗教に入っていたが、キリスト教を信じるようになった。

そして、私が最初に紹介された視覚障がい者のTさんと鍼の会で知り合った強度の弱視のKさんが創価学会をやめて私たちの集会に加わり、のちに弱視のHさんと結婚、その人もまもなく信仰を持つようになり、Kさんに誘われた全盲の男子もまた集会に参加するようになった。

さらに、中途失明のSMさん(鍼治療院)も、加わるようになり、またそれとは別に、夫君が交通事故にあつて全身マヒの寝たきりとなつたやはり視覚障がい者(弱視)のKTさんも、キリスト教に導かれた。

そうして、私が盲学校に導かれて多くの視覚障がい者が加わり、さらにその方々のとこ

るで家庭集會が開かれるようになり、私が教員を退職してのちそうした何人かの視覚障がい者のところで家庭集會がなされるようになり、それはもう10〜20年以上続いている。

そして、私が理科を教えたろう学校の児童、生徒たちのうち、6〜7名が私たちの土曜日集會にも参加するようにになり、彼らが成長して、のちにキリスト者となった人たちもおり、その一部が、証しを書いていているのを知らされたの次に紹介する。

それは、彼らが所属するS集會の開拓50周年記念誌に投稿されたものである。(YHさんの証しだけは、「聖書の光」(2013年9月発行)より)

一般的には、ろう者のキリスト者に出会う経験はごく少ないし、その人たちの証しを読む機会もほとんどないので、ろうあ者のキリスト者として

の歩みの一端を知る参考になればと次に引用する。

○YHさん：私が初めてイエス様について聞いたのは、ろう学校の小学部のときでした。

理科の先生がクリスチャンで、「この世界には、神様がおられる。その神様は、苦しいときに求めるなら必ず救いを与えてくださる」と言われたことを今でもよく覚えています。

その先生の机の上には、いつも聖書や神様に関する本がいつもたくさん置いてありました。：社会人になっていろいろな困難に出会い、人間関係に悩んでいたときに現在の妻と出会いました。そのとき、彼女がクリスチャンだと聞きました。：「すべて労する者、重荷を負う者は私のもとに来なさい。あなた方を休ませてあげよう。」(マタイ11の28)

と聖書の御言葉にあります。教会に行くと、私の心が軽く

なるように感じて、神様は本当にいらっしやるのだと理解できるようにになりました。

○HKさん：洗礼を受ける決心をしたのは、ある姉妹が主に導かれた証しなどを話してくれたからです。「今の世の中は、終わりが近づいている。天におられる神には、多くの恵みが豊かにあつて、信じる者に恵みを多く注いでくださいます。信じる者は幸いです。」

それを聞いたとき、私は、ろう学校の小学部のとき、吉村先生からたくさんの御言葉を教えていただいたことをおもいました。

①求めなさい、そうすれば与えられます。(マタイ7の3)
②狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく：(同7の13〜14)
③空の鳥を見なさい。：あなた方の天の父は、これを養ってくださる。(同6の26)

④私のところに來なさい。私があなただ方を休ませてあげま

す。(同11の28〜30)

○KAさん：私がろう学校の小学部6年のとき、ろう学校に來られた新しい先生は理科の担当をしていて、クリスチャンでした。私はその先生を通して初めてキリストのことを知りました。でもそのときは御言葉の意味が難しくわからず、一生懸命繰り返してみても、神様のことがわかつた気がしませんでした。

先生が、「人々は、イエス様にいばらの冠を頭に載せ、手と足とに大きな釘を打ち込んで十字架に磔(はりつけ)にしました。」と説教してくださいました。私はずっとも理解できず、無神論者であった私は、関係ないと思っっていました。

それから中学部に入り、寄宿舎に入っていた私はある友だちと出会いました。そしてその友人からキリストについていろいろ話の中で「塩狩峠」という話しに心を打たれ

て、すごく感動して私はすばらしい神様がいたことがわかり、涙が出ました。

それから、毎日曜日に徳島聖書キリスト集会に通うようになりました。…。理容科に進学して校外実習をするため、理容店に行ったら、その店主もろう者でクリスチャンでした。先生を通して私はS教会(*)に連れていってもらいました。

卒業後は、理容師になったので、日曜日が礼拝である徳島聖書キリスト集会には行けなくなりましたが、その代わりに月曜礼拝のあるS教会に通うようになりました。

しかし、その牧師の説教は、手話がうまく読みとれない私は理解できずついていけないので、教会に行っても空しく思えて、心のなかにイエス様を受け入れることができませんでした。

あるとき、その牧師に、あの姉妹とともに怒られたのが

きつかけで心傷つき、心を閉じたまま教会を離れてしまいました。それから長い間、遊びに明け暮れたけれど、何もかも空しくなってしまうました。

そんなとき教会に新しい牧師が来られるときいて、行きたくなくなり、久しぶりに教会に行くことができようになり感謝しています。それから御言葉聞いて 少しずつ心を開くことができるようになりました。：

(*)徳島県立ろう学校のキリスト者の卒業生たちがもたくなって起こされた教会。私の授業を受けて、土曜日の集会にきていたろうの子供たちは大きくなって私が知っているだけでも6人ほどがこのS教会に行くようになっていた。

○CTさん：イエス様との初めての出会いは、ろう学校の小学部5年のとき、理科の担当の先生がイエス様のことを話したので、「頭がおかしいのではないかな?」と思っただけです。

それがイエス様とともに歩む人生の始まりでした。

普通高校に進学した私は、卒業後、初めて健聴者の社会に入りました。しかし、その社会によく溶け込めず、よく小学校時代のあの理科の先生のところに行き、聖書の勉強をしていました。そうしながら高校を卒業し、仕事についたのですが、その職場にクリスチャンのろう学校の先輩がいて、ビックリしました。私はすぐその人に、「教会に連れて行って」とお願いし、以来、北島のS教会に通うようになりました。教会でのイスラエル旅行に参加し、ガリラヤ湖で洗礼を受けることができ、感謝で一杯です。：

そしてもう一つ、イエス様はどんなときでも決して私たちを見捨てないことがはつきりとわかりました。祖母が寝たきりになり、やせ衰えていきました。私は何回も「救われますように」と祈っていました。

した。祖母が危篤状態となり、私の心は混乱状態になり、三日間眠れず、「どうか救ってください」と一生懸命に祈りました。次の朝、カバンからハンカチを出したら、偶然ミニ聖書にはさんであつたしおりも一緒に出してしまいました。元に戻そうと思つてミニ聖書を取りだしてぱつと開いたら、次の御言葉が飛び出したのです。

「あなた方は心を騒がしてはなりません。神を信じ、また私を信じなさい」(ヨハネ14の1)

この御言葉に触れて、何か深く突き刺さったように、急に心が落ちついて、神様に感謝の祈りを捧げました。その日の夜、祖母は天に召されました。

思いがけず転勤したろう学校において、まったくそれまでは知らなかった聴覚障がい者の方々の世界に触れ、これまた本を読んだだけでは決し

て分からない数々のことを学ぶことになった。

そして、私の教え子たちが、右に引用した文で見られるように、成長してから次々とうあ者を主体とするS教会に通うようになったこともあり、県下の多くの教会が合同で毎年行なっていた市民クリスマスという郷土文化会館で行なわれる行事において、S教会のろうあ者と徳島聖書キリスト集会の聴覚障がい者たちと健聴者も含めての手話讚美が毎年なされるようになり、双方に関わりある私が指揮をすることになった。

の方々の信仰や考え方に直接触れる機会ともなった。

そして今日に至るまで、3年ほど、聴覚障がい者の方々の関わりが続いている。私が、教員として最後に希望した学校は、肢体不自由の児童生徒の教育の場である、養護学校での勤務だった。ここに転じてまず驚いたのは、肢体不自由とともに聴覚の障がいをも併せ持つ重複障がいの児童に対して、まったく聴覚障がい者としての教育がなされていないことだった。聴覚障がい者には、後から話しかけてはいけない、ということは基本のなかの基本であるのに、そのようなことはまったく無頓着でほかの肢体不自由の子供たちに対するように、後からも横からでも話しかけていた。それではもちろん聴覚障がいの子供は何を言っているのかわからない。それがごく当たり前のようになされていた。

それはろう教育を経験してきた者として到底だまってい見過ごしてはおれないことであつたので、その養護学校の児童生徒たちが所属している隣接の肢体不自由の養護施設に赴き、手話や指文字、そして前から口をはつきり開けてものを言うこと等々、ろう教育の基本的なことを伝えたいと出向いたが、はじめは、その養護施設の看護師も生活指導員や理学療法の責任者たちもみな、手話の必要性とか、口を大きくはつきりとあけてゆつくり話すといった基本さえ受けられようとはしなかった。

しかし、例えばごく簡単な日本語―「今日の放課後には、全部の生徒に校長のお話があります」といったことをその聴覚障がいを持つ児童に普通の子供に話すように話して伝わるのか―と聞いたのだ。とき、初めて言いよんで手話の必要性を認めるようになった。そして、そのうち、理学

療法科の主任は、はじめは、聞く耳をもとうとしない状態だったが、繰り返し私のろう経験から実例をあげつつ時間をかけて説明したらようやく納得して、理学療法士、作業療法士たちを希望の者は、勤務の空き時間に、私が行なう手話の学びに出てもよいとの了解を得ることができた。

そしてそこで手話のテキストとして一般の単語、会話とともに、聖書の有名な言葉―例えば―狭き門から入れ―などを取り上げて折々に聖書の内容を手話とともに話していた。そうした人たちのうち、Mさんは、私が退職後も、引き続いて聖書を学びたいと希望されて私たちのキリスト教集会につながる家庭集會に参加されるようになり、その後、日曜日の礼拝にも参加されるようになった。方もおられる。

最後の学校勤務において忘れることができないことがある。

それは、私は、以前から日曜日には、必ず主日礼拝に出る。そのために何らかの行事があっても年休をとって休むことにしていた。

そのかわり、他にはほとんど年休はとらなかつたし、ほかの先生たちが休憩時間としている昼休みの時間も、子供たちと授業を離れて自由に開く時間としていた。

毎日のように、子供たちの何人かは、私の理科教室にやってくる。飼育しているいろいろな動物たちや理科室にも置いてあった、理科関係の昆虫や植物などに関するもの、あるいは歴史や人物に関する学習マンガ等々、初期の古いパソコンでのゲーム：等々をするためにやってきて、私は昼食をとっているときでも早く来る児童もいたりして、昼の時間も子供たちと接することにしていた。

あと数カ月で教師を退職するというとき、日曜日に学校行事の文化祭があつて、ほかの先生方とともに私は車いすの特定の子供に付き添って出る必要があつた。それを休むのは、ほかの先生もそれぞれ担当の児童があるので、難しい状況だつた。

教員になつて二つ目の勤務高校から、ずっと日曜日に何らかの勤務がある場合でもキリスト教の礼拝のために休みを取っていたが（高校では日曜日にはほとんど行事などはなかつた）、この養護学校では状況が異なる。それで、どうすべきかいろいろと考えさせられていた。

そのとき、産前休暇に入っていた同僚教員から電話があり、「私が代わりにその児童の付き添いをしましょう」と申し出てくださったのである。

私が日曜日には必ず休むということ、以前の勤務校の教員を友人に持っていて、知っ

ていたとのことで、また同僚からもそうした事情を聞いたとのこと、そのようなことは通常では考えられないことだったので、驚きながらも、感謝して受けさせていただいたことだつた。

そのようなことも、予想もしないところで神は助けの道、逃れの道を備えてくださる。ということ、最後の学校でも深く知らされたのである。

こうしたさまざまのこと―それらはみな、私が神を信じて思い切つて踏み出した一歩を、神が応えてくださったという証しであつた。

そしてこうした経験が与えられたそのすべての出発点は、キリスト教信仰が与えられたからだつた。

私はもともと、神やキリストなどいっさい求めることもなく、無関心であつて、ただ自分の病気や家族の問題とともに、学生運動のもつとも激しい時代と状況にあつて、世界

や人間の将来という、科学技術と人間の未来等々など、まったく光が見えずに苦しんでいたその苦しみに神が応えてくださったって信仰が与えられたことにある。

神は愛であるゆえに、人間の深い悲しみや苦しみをご覧になつていて、神のときが来るときには、一方的にその恵みを注いでくださる。応えてくださる。そしてひとたびそうした神を知らされたときには、「求めよ、さらば与えられん」という約束のとおり、神の国と神の義をまず求める精神をもって、いろいろな問題の解決を求め続けることによつて応えてくださる。

神は生きて働いておられる。そして求める者には、たとえさまざまの弱さや欠点、また罪深き者であつても、必ず何らかのかたちで応えてくださるといふ確信を与えられていた。

休憩室

・明けの明星

最近では夜明け前の早朝5時からから、東の空に明けの明星がすばらしい輝きを見せてくれています。

古代のキリスト者たちが、夜明け前に集ってキリストへの礼拝、賛美を捧げていたことが古い文書にも記されていますが、そうした早朝に集会の場所へと急ぐ人たちの前方に輝いていた明けの明星は、再び来られるというキリストを指し示すものだったのです。イエスご自身の言葉として、「私は輝く明けの明星である」と記されています。(黙示録22の16)

通常の星とは大きくことなるその強い光、まばたくこともなく、じつと見つめるように輝く明けの明星、初期のキリスト者たち以外にも、電気な

ど人工的な明かりのなかった世界の長い歴史において無数の人々があの強い輝きに目を見張り、その光とともに送られてくるメッセージに心の耳をすませ、見入ったことと思われます。

お知らせ

○クリスマス特別集会

12月23日(日) 午前10時〜14時。

内容：クリスマスメッセージ、子供とともに、いのちのさと作業所の人たちの歌、賛美のひとつとき、1年間の感話、証し、交流タイムほか
会費：500円(弁当代金)

○元旦礼拝

2019年1月1日元旦
朝6時30分〜8時

早朝ですが、あたらしい年の最初を、御言葉により、祈り

と賛美によってはじめましょう。

○冬季聖書集会 (キリスト教独立伝道会主催)

・2019年1月12日(土)〜14日(月)

・会場：奥多摩福音の家

〒198-0105 東京都西多摩郡

奥多摩町小丹波¹³⁵

電話 0428-85-2317

・内容：聖書講話(講師 吉村

孝雄)、感話、賛美のとき、キリスト教の映画鑑賞、

(「アメイジング・ジャーニー 神の小屋より」(原題：The Shack)) 早朝祈禱 他。

・参加申込、詳しい内容に関しての問い合わせは、次の方

まで

小館 知子 kodatetomoko@gmail.com

156-0052 東京都世田谷区経堂

5-3-12

電話 090-7183-1214

○北田康広さんのアメイジン

グ・グレイスCDを聞いた方から、彼の音声などの録音はないかとの問い合わせもあつたので、映像のDVDのことを書いておきます。

DVDには、以前テレビのアンビリバーボーという番組で放映された北田さんを描いた番組、やはりテレビのキリスト教放送「ハーベストタイム」や地元の四国放送での収録録画などいくつかを録画したDVDがあります。ご希望の方は下記の吉村まで。(送料とメディア実費として200円、切手で可です。)

編集だより

来信から

「いのちの水」誌11月号を読んで

1、「都合のよいことだけを答えてくれるということだけ

でなく、意図的に悪事をなし、あるいは真実に背き続けるならば、必ず、魂の平安を失い、清いもの、美しいものへの感動する心を失っていくという形で応えられる。」

「聖書全体がさまさまの意味で応える神のことを証している。神が愛であり、真実、かつ全能であることを信じるなら、神は必然的に応えてくださる神でということである。」

まことにそのように私にもさまざまな意味で神が応えてくださったので、今日まで生かされてきた神の愛を深く実感できました。

そして、悪事を悪事と悟れない人に福音が伝えられて、悔い改め、立ち返えることが出来るように、祈り続けて行かなければと示されました。

かつて中高校生が大変荒れた時代がありました。そこまですら荒廃した学校があったとは、事実は小説より奇なり、の感でした。

また、定時制高校での記述のあとの部分で書かれていたMさんに関する記述を読んで、胸にジーンとききました。

神様が吉村さんを遣わされた学校では、良いこともそうでないことも神様が経験をお与えになりました。

真理に従おうとする時に、何らかの苦しみがあり、その中で必ず応えてくださる神がいる、生きて働く神がいることを、この度の具体的な「証」から、力と励ましを頂きました。

全国集会でこのような講話は初めてではないかと思いません。学問の披露の内容を重ん

じる傾向がある無教会に警鐘を鳴らしていただけたものと思われます。(東京都の方)

2、私達は神様からの多くの恵みを感じ感謝する応答が余りにも少ないとのこと全くその通りに思います。

『我が愛に留まれ』主イエスの愛に留まる事は如何に大事であるかが良く分かりました。

そうすれば敵が多くいても勝つて行くことが出来る事が証しされています。

いかに人間が罪深い者であるかが良く分かりました。

そうした中でも、神様の全面的な応援があるならば勝利していくことができます。

「御跡を行くこそよなき幸なれ」ですね。(九州の方)

徳島聖書キリスト集會案内

・場所は、徳島市南田宮一丁目一の47徳島市バス東田宮下車徒歩四分。

(一) 主日礼拝 毎日曜午前10時30分
(二) 夕拝 第一火曜と第三火曜。夜7時30分から。 毎月第四火曜日の夕拝は移動夕拝。(場所は、徳島市国府町のちのさと作業所、吉野川市鴨島町の中山宅、板野郡藍住町の奥住宅、徳島市城南町の熊井宅の4箇所を毎月場所を変えて開催)です。

・水曜集会：第二水曜日午後一時から集會場にて。・北島集会：板野郡北島町の戸川宅(第2、第4月曜日午後一時より)。
北島夕拝は第二水曜日午後七時三十分より)

・天室堂集会：徳島市応神町の天室堂はり治療院(網野宅)、毎月第2金曜日午後8時。

・海陽集会、海部郡海陽町の讚美堂・数度宅(第二火曜日午前十時より)。

・いのちのさと集会：徳島市国府町(毎月第一木曜日午後七時三十分より)「いのちのさと」(作業所)、・藍住集会：第二月曜日の午前十時より板野郡藍住町の美容サロン・ルカ(笠原宅)、・小羊集会：徳島市南島田町の鈴木ハリ治療院にて。毎月第一月曜午後一時。・つゆ草集会：毎月第四日曜午後一時半。徳島大学病院8階個室での集まり。

著者・発行人 吉村孝雄 〒七三七〇二五 徳島県小松島市中田町字西山九一の一四 電話・FAX 0885-32-3017 携帯080-6284-3712 「いのちの水」は、自由協
力費です。郵便振替口座 〇一六三〇一五五五九〇四 加入者名 徳島聖書キリスト集會 協力費は、郵便振替口座か定額小為替、または普通為替で編集者あてに送って
下さい。